茶道筌蹄

一

223

ヲ9
1408
1

門ヲ 1408 巻一

慈三齋主人編

茶道筌蹄

玉茗書合梓

如是我聞

茶

岳說峰宙寥野人書

敬亭藏書

茶道筌蹄巻之一

目録

和漢茶之濫觴
茶會
同節席
點茶茶　爐　風炉
相傳物
小座敷
床類
釣棚
拉類

庭之部

同小道具

水遣付道具

棚物

士事

茶師

茶名

明治四十一年七月一日
執行弘道氏寄贈

○和漢茶之濫觴

夫茶を隱士の玩弄すゝを風雅礼式を尊とし次中興茶を喫する初を江南の人ゝ茶を喫する次唐の開元年中より玉川雲巖ゝ和の寺中より堂塔を造り沼沢を茶と喫しめ瞑眠を除らしむ是を普く茶を喫する緒と

ゝもいまゝ茶の礼式定り次唐の陸羽より茶礼と定め（陸羽字を鴻漸素竹翁と号し或を竟陵子又東岡子と号ス）茶経を作りて茶の切紙をゝびゝ茶具廿四を造りて遠近幽寂せり御史李卿といゝ人陸羽が茶ゝを

竹を見をうゑ世てこれを結て陸羽ちゃ茶経と
なづく自茶経点じて是をすゝむ茶度年て乗
卿錢二十文と以て茶酬也と本傳よりかくのごとし
今日本にて茶道と号する人口切と号して新茶を以て茶会を
催すとき茶礼と号して多限を点を送ることなり是事の
始末は本傳に詳なり 又陸羽建安にて山水の画壁間を
飾る古琴一張を側に置き茶を嗜て風雅を
専らし茶製法を定め茶櫃茶竈茶舟の五種を
多つ唐より宋に至て茶を煮て世に甚し
尚これ日本の如く侘と名ずけて富貴の人を
いとも陰侘と変ずる風雅を式法にしたがひ
そぐ味と色と水とこれ編ぶるのを為す又

日本にて茶の權輿は上古より茶の味を好むことなり
人皇を用ゆるこれ始まるい
桓武帝の御宇に傳教大師入唐して密教の付茶の
事なり始て日吉の社
記に見えたりまる
平城帝の大同元年に弘法大師唐より帰朝乃ち
茶をとり始め弘仁年中に至て
嵯峨帝に勅ぜらるもいへり又東鑑に建保二年建仁寺
の栄西禅師宋より帰朝の時茶の種を結へこれを
筑前博多に栽て後嵯峨に奏して實朝に茶を喫
しめて酒の病を除くといへり其後明恵上人信濃

の茶と梅の尾よ稀し栽く或は蒸し或は焙るの
製法を伝受しを基ぶ茶代家に見るるを貴賤
茶の粧趣行れ来りて代を以て賞翫と為くるる
かくなるく玩くなくしを一定し難しといへども
日本紀に引茶の節會といてとなれを
我朝も上古より茶を飲ること為くるる後
ども當世のごとくは茶會代設て式法を定め古蒐珍
玩を弄ぶ始まるるし事は東山殿の比より珠光茶
道式法を定め珍蒐を翫ぶ継く紹鷗利休等此道中
興の祖とするし世間普く賞翫し茶道盛む
り行れ

又二

○茶會

往昔を茶會といへり太平記に佐々木道誉など
茶會に僧侶といふ支この紹鷗利休居士の時代
に至て茶の湯と称し茶の湯と仏家は奠茶
奠湯を畧して茶湯といふ居士是は混せ為れ
ども茶の湯といへりしそ

昼　利休居士の時代にて二食もり已の刻と昼飯と
晡時と夕飯といふ支牧昼の茶の湯といへば巳の刻時分と
いへ當時一日は三食ふる更に昼の茶と六午時のこころりぬ
夜咄　むし八晡時より点地入せし牧中立は点地小堂
も火入まるも昼夜咄ともいへ支は當時

夜咄も暮六ツ時より露地入をする（但し客入じて炭をせばり茶菓点て終りて炭仕
いろ〳〵水を注
食事煮物
八ツ時と五ツ時の客六ツ半より始る時は炉風呂とも食
茶は炭とも仕り釜の水を加へ呂は鉢六ツ時より水を汲て
釜仕懸し下火のよう〳〵なる時五ツ時より始る
炉風呂とも昼の茶湯より始る
朝
七ツ時より露地入をする夏は六ツ半より
茶は黄昏より露地へ水を打焼茶碗
入を整て火を消し暁七ツ時より炭を
通炭仕霜月消し炭たるまでかよう火をともれば
徹夜の趣にて一入風情なるよし 依釜を茶夜より仕

無亟客待合へ出る炭仕て二ツ加へ水鉢の水を
改め迎ひ入れ炭より法生姿酒ぜんざい餅などの物を
出し一菓茶を寛て点て宗旦仕られし落葉掃て底を取
釜仕据へ特也紀水を仕て湯釜にかくる板釜
を中釜を仕用也夏は水を汲仕る紀
烹炭を取り水を仕るぶよし 備炭
は茶湯を暁仕出る時実上げと明ケ方炭引き夜も
午の〳〵と明るぶ極の時別もまども除るよケヌキ
合をせんとをろ〳〵かぶ据仕出て席も
暁をまば炭仕をろ〳〵と引よをろ〳〵と引べし据
座中午の時〳〵は据仕出て汁は何むるふ

亭主より名乗るもさびさび面白く小刀して突上げ
窓の下へ寄りかゝる時ハ亦座へたゝみしべく突上げる
席ハ連子の戸を陸子と仕者る是も客へ出すこと也
よろ〳〵 懸中立中ぐハ居ふかゞ出るゝとふたべく中
立居ハ居ふかさ〳〵とふたべく客も居ふ紀ふと
とゝもよし

飯後 菓子菓子ともに 飯後ハ五ツ半時 昼飯後ハ九ツ半とも紀
いづれも菓子の菓子 飯後ハ正午の菓食の飯麈
ゆゝしぬ 昼飯後 夜ハ夕の飯麈
ゆゝよ客のゝ得ぬ一ゝ

不時 無約ふ〳〵よ客かゝりて僧ハ出へ道具万端居

荒ゆ〳〵ゆり

跡見 跡見ハ飯菓正午の後より限る夜咄ハ初刻ふ〳〵
客を近辺ゆゝ寄りゆり何方ゆゝ出案内をゆゝ亭主
方へ中入ゝ亭主飯菓午時の菓海ハ牙花ゝ
露地へ入 跡亭主座へ案内とふ客を案内ハ居ふ
ゆゝ 但し次ハ蒔ハ食もよく炉中と言の麈 僧水さ〳〵の茶へ袋とゝ
ゆゝる菓茶とかゞりはゆゝ水ゆの水とゝ居ふ近ハ
出る 但し露地へ水を打ゝ客座へ出ゝ紀亭主
菓碗と絲の紹ゝ 絲ハ口明ゝ例 挨拶して出
ゆゝ点菓代ゆ〳〵 客ハ菓入菓物とかゝ一礼〳〵

退出るなり支度ありて急ぎるるも例の如くして座敷に菓子を出し薄茶代点るもよし菓子をばすぐに待合に出し直ちに元来辺見の趣意は主客方へ旅立とする日限急ぎなせる所用支度繁くして本日の間を得るもあるべし何とぞ亡父の位牌に洗茶支の儀会さると客方より先ずは故誠に火急なる場合なれば止むを得ざるべき支く

獨客

客待合に腰をかけるも中央より下へ坐すべく席に居くも同様なれども主人の心得ある淋しくあるべきなれども主人の座は茶点器の末席に

座敷の掃除は前日に済ませ料理は指定客へ進めし茶の指図指出し相伴する其後は通例用ゐる例のごとく法通ひ吸物椀を引き紀事主者拭乃椀と我指く事せ掃除へ拭椀掃除すして吸物を拭きるあり又吸物中でお使ひして吸物椀を指に事せ掃除へ拭乃湯を通ひに出さるもよし法通ひ吸物を引き掃除へ入る時客主間柄は寸打出るもよし通ひ盃を洗め掃除に入るに紀事主吸物椀を指く事せ掃除へ拭入湯を掃除すしてお使ひ客の指図下るもよし点茶の前客より指に茶も石上に置き毎に接拶にて時は二人分の茶代点て客より右の接拶に

亭主より法おはいあり二人分の菓と点
茶一椀と一礼して茶碗呑むと紀亭主は直座の
客の中より座はくくを取くくに坐客すゝハかし坐成
進めてくるとゝ茶碗ハまよりまへ交ゝ帛紗(フクサ)とをづ
して呑む客一礼をもバ茶碗成客の前まで取る帛紗
とさげ定座に戻る

○月節序

大福　正月元日より十五日まぐの菓金糖い
春　正月十五日以後と云菓とい
風炉　暁夜炭ハ中ゝ七ゝとも紀ぬでは釜社寺ゝ変
名残　古菓の名残といふ中ゝ風炉の名残といふ中

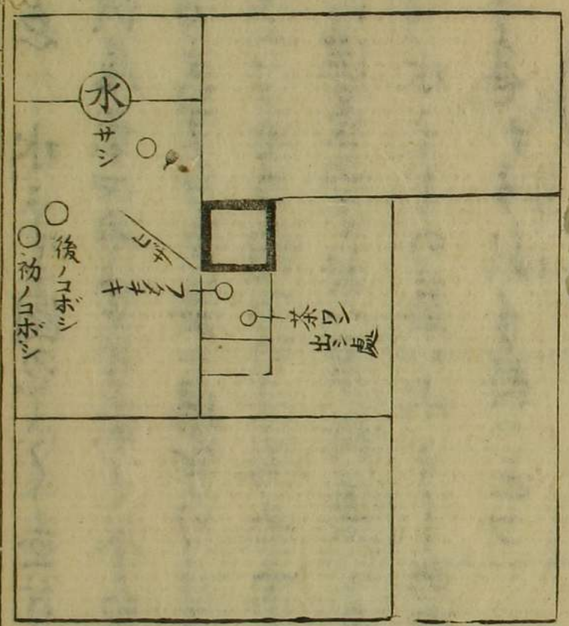
ゝ炭ハ八月末より九月ゝかまくゝ使ハ
口切　九月の末より使ハ歯年新菓の口切ゝ

○點茶菓

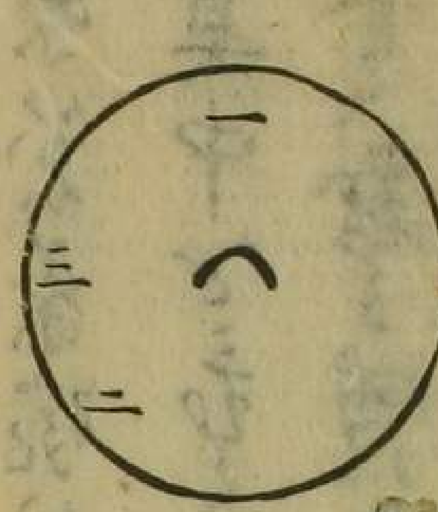
口垂水点　水さしの向ふ留中の真ゝかゝ左右ハ留中
の真ゝより水ゝ客付くゝ客付ゝ水指ハ使
ゝ大ぶ水指ハ使
ゝべゝいづゝ炉縁の外つゝより水指の前までハする
ゝ毎ゝ点付る茶碗の留垂の目口ゝ向ゝ
ゝの留垂茶ゝ人へ点ゝる茶杓の先水さしより八分
ゝく程ゝ点付ゝく茶筅を流ハ炉縁の角筋ゝ
して炉縁の角と水さしゝの真中と茶筅茶筅の
留の真ゝより茶筅茶筅の留乃垂の目口ゝ居前ハ

炉縁の角と書つよとれ蓋を茶入と成両様の目どり
すまり釜の蓋成れるふおゝ居茶の上る程をまるべし
支仕人の長短よりつく茶へ進むと後くよれとゐるべゝ
建水初め炉のすゝぎりよ亜紀点前よかゝれと紀
炉縁のすゝと建水の書つよ曲る毋ゝよ物ゝ亜紀蓋を八
亜の目一ゝ五すゝ上の蓋を紀とゐゝらふカキタテ
環ハゝゝりゝる向へ出ゝ紀大蓋八向へ出ゝ紀よおよそ
環の茶巾とのせるよさゝぐる向へ茶碗出ゝ拭き
炉の右乃かゝ亜成炉程とけゝぶ其寸別の書れて
環付の通り物亜炉縁の内ゝ三ゝ別一ゝかゝ居茶の
通りゝ引く

○古流点亜亜の書中水さゝの書大小よかゝれ
茶茶茶碗八炉縁左の角と水指との筋へ茶入乃
真中と亜ゝ蓋亜八亜の縁の内物ゝ物ゝ引
釜ゝ亜る向八書ゝ引居茶八おゝ向へ寄る



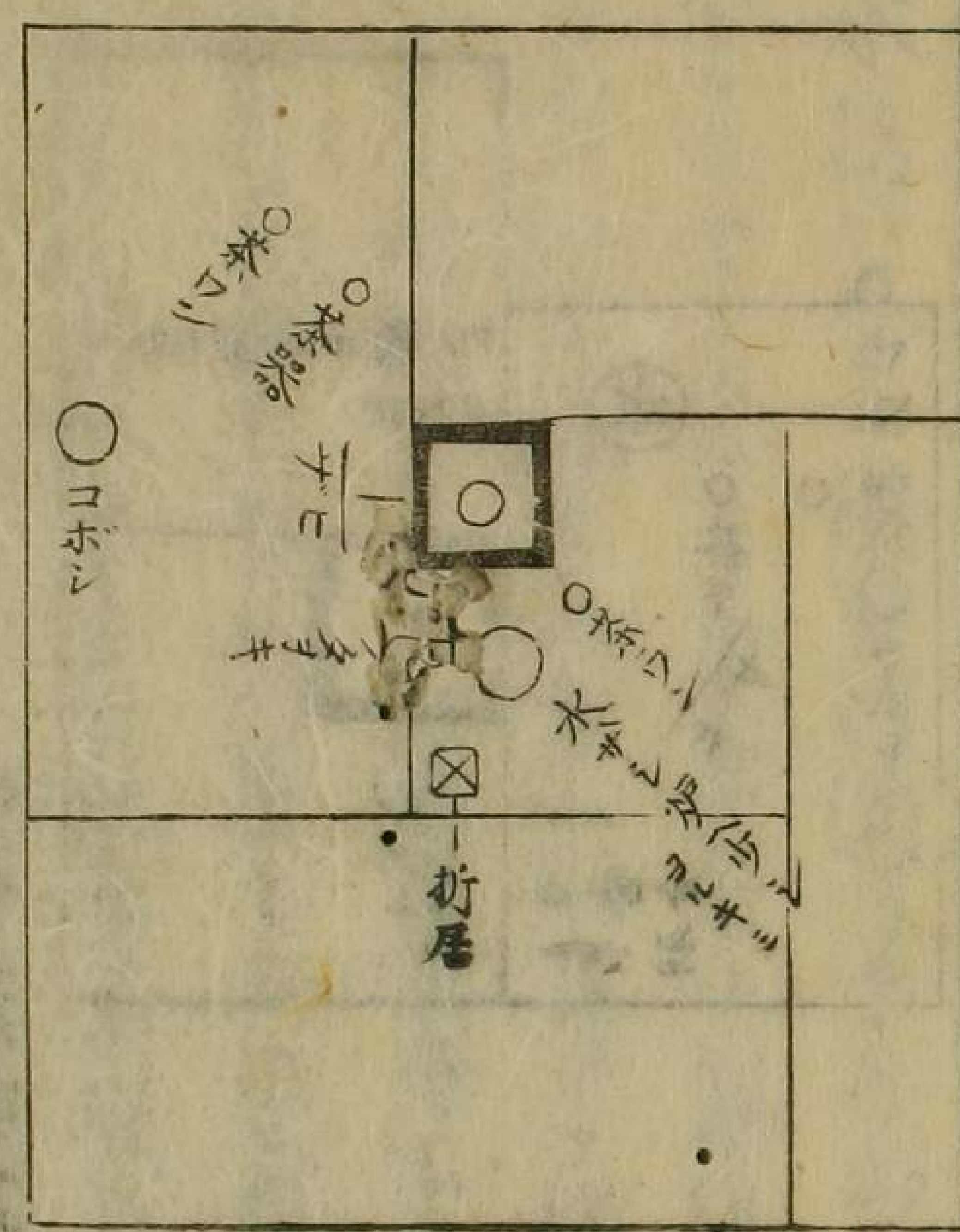
四畳半流点　水さし圖のごとく並付る茶器茶わん初
より流して居茶四畳半手前と同じ釜のまへの炉前は
炉より奥の方へ寄すくフタ並ハ縁をはなして水さしの前へ
大蓋置へりより内へはしらふ茶わん畳香合出して
而ハ出して濃茶のときハ帛紗茶わんの前へ建水の畳を
半の通り水さしの蓋ハ水さしの右へはじきとおへ
寄しをよせかけて手数ハ二ツ



此手前濃茶ありハ
[illegible]

茶巾の折居ある茶碗とすじかひ

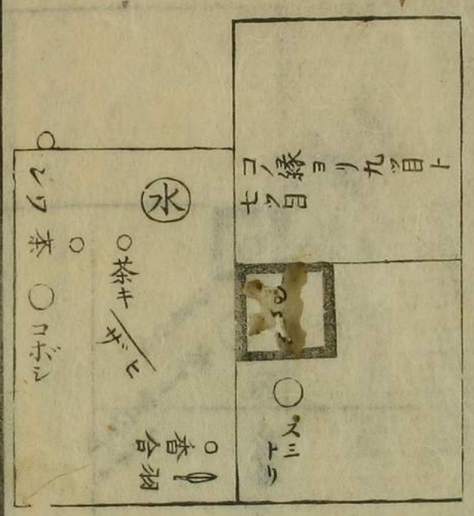
四畳半左手前　居茶ハ畳目茶入の蓋をならべて茶わんの
茶入れ釜の蓋帛紗まて右肉ハ其フクサ建水のむかふ
畳ふちへむき移と左の手へ渡し帛紗と右の手まてく
れすぐに蓋をとる后建水のうしろよむべし



畳目　曲水さしハ客付の方乃畳のへりより九ッ目釣瓶ハ

七ツ目此割合すく除の水指此器すべし・炉縁の外筋と
肩との高さ亥く居ハ三角茶筅茶碗ハ百中の高さの
目四ツ両方へ開く扨引ものハ炉縁の外口ハ割一ツ分
炭ハ茶ハ羽箒香合も添ると高さ山羽箒の亥
ものハ真のもの

但し此基子長板箒
羽箒真亥ハ亥もよし

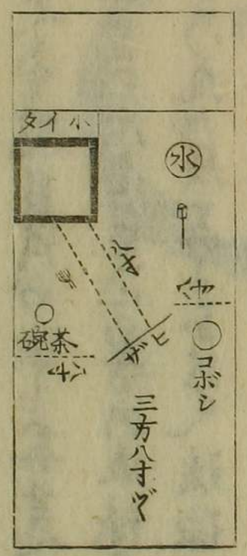


向切　水指ハ釜の環付の通るようにし先へよる茶筅と
茶筅よりすこして亥茶筅と筋遠く炭ハ茶亥亥釜
炉縁ハ方ハ寸縁ハの方へ引付ハ縁ハ向板の上く炉の高
ハ亥く向板ハ高ハ香合亥亦ハ亥亥し亥合小ハ
小板の高ハ亥大ハ炭ハ炭ハの高ハ

但し向板ハ高ハ紀亥小板二寸二分亥ハ尺五寸の
寸法ハ六尺三寸の亥ハ小板一寸ハ

向切左手茶　右手茶のうち返しにて組し茶筅茶筅
と並べて柄杓ハ筋違ひ引茶筅フタを茶碗の前
向切左手茶流点　先のごとく水さし茶筅茶碗と並ぶ
建水ハ杓蓋並仕込なうち側の面ハ並べて炉の方へ
向ふ仕様図のごとく三方とも同じ明きハ出ル花はじめ
蓋並へ杓を引け茶筅茶碗先のごとく居前へとり出し
帛紗ハて清め図のごとく左の手の縁一ヘんて茶筅茶
並べ茶筅と茶筅ハ炉の方へよせ斜ハ並べ杓を
とり左へ渡し蓋並と建水よりハ出し右のほうへ
多指の先ハ並べ全の蓋ととり蓋の上へ杓を茶を点ル
夏常のごとし　仕点ハ茶筅を茶碗と茶筅乃

跡ハ並し　水と張ル蓋と釜へ仕舞ひフタ並ハ仕ぼし乃
後の方へ並べ杓を建水ハかも茶碗ととりて左乃手へ
渡し　右のほうへ茶筅ととり様ととりて水さしの茶
元のごとく順ハ建水へ引く



隅炉　茶手茶ハ炉の風炉のごとし　炭手茶乃節客
炉辺へ寄つまく洋ハんせば但し添炭並ハ炉
ハ右ハ並ハ非ハ炉ハ
風炉並付様　炉並付様ハ基ハ向ハ六寸

九畳ハむつ〻ハ八すゑつ〻しゞ今畳七すゑ宝む一乃まゝ
ゑ小ゑ中明ケて一す突込ハ九ッ目十一目大板ハ三ッ目九板ハ
五ッ目いづ王も畳の客付すて合ル（但し大板一尺四寸四方ゑ
板蓋玄殘ルゑ乃ち点茶の
ゑ元板の上ゑ横ヲ引く）灰をゑ入て畳ゑ笹風呂式まゝすて玄ゑ五徳も
畳上ゑ居くゑ風呂式おし〻客付へすゞらして灰式
ゑ乃ち客付の灰ゑ見込の方乃五徳の爪の外つゝと口ル
見付の方乃爪ハ灰ゑ畳ふ乃ち琉球風呂畳ゑ風呂畳
押切灰二文字雲龍風呂式其餘ゑ風呂又ゑふゑゑ板ゑハ
二文字蒔（マキ）灰ゑ鉄風呂ハ押切かゑ上ゲゑ。
風呂灰の名所　風呂ゑ灰ひゑ左ゑハ乃付右ハ乃込向ゑ山
大風呂ハ山二ッ五徳の爪ゑ挿む小風呂ゑ山一ッ五徳の向

向爪ゑ畳ゑ乃ゑ山ゑ乃込ゑの爪ハ切落し
大風呂ゑ山ハ大尾張文阿弥院堂の彫ゑ

見込

見付

風炉ゑ茶　水さし釜環付より向へ喰違ひ横ゑ乃
縁ゑ風呂ゑ乃中ゑ建水ハ様一ゑ乃ゑ蓋付ケ浸様より
ゑ乃出ル仕舞ひの節ハ茶筅茶碗中仕舞ひ棚ゑ乃ゑ
ゑして飾もゑル
風呂炭ゑ茶　香合客へ出ルハ釜の下モゑ寄出ル樹ゑ乃ゑ

棚と釜との間へ出したる茶碗取と釜との間へ右の通りを出し客を手前の出し座へ戻し

風呂たる茶　中仕舞ひすゝ〻茶筅の蓋ハ何すくも茶碗の前へ居茶ハ出し座扨もまの座風呂もまの座蓋ハ左へ

右の通り繰返し〻

風呂ゝ座　中座といふなり　たゞ茶ハ用ひず　間中の中央へ風呂敷座すゝ小板

竹墨子長板　かざり小板と用るとき水さし敷風

呂と縁との間へ押込客分の方へ筋違へ座く但し

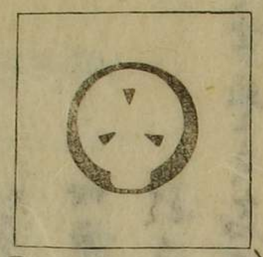
小板の角と目通とすべく尤細水さしを用ひ水さしの

蓋を左のほうへ縁の方へ水さし〻へ次茶筅茶

碗茶筅のごく蓋を水さしの胴へ座く中仕舞ひ

炭を小ぶりなる紙用ひ火箸とおろし帛を拂ひ

建水の向ふ



○相傳物之事

習爰十三ケ條・茶通箱　唐物点

盆点　乱飾　真墨子　其ほか天目

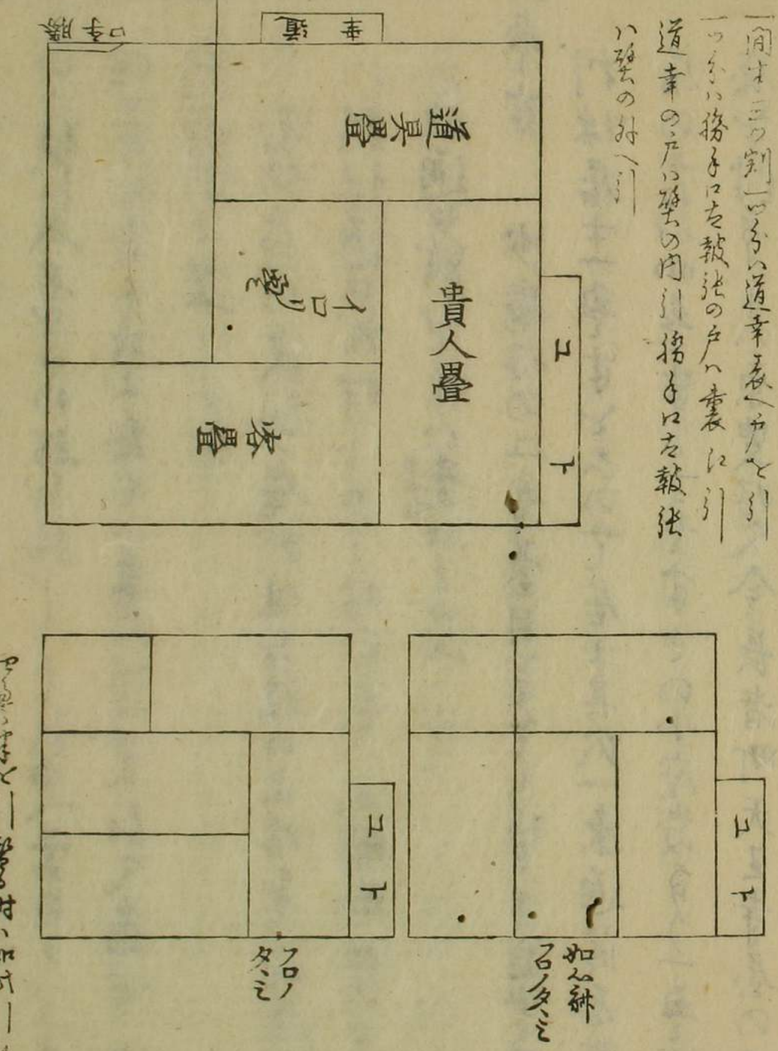
右何もお伝授の書ハ不記但し習事ハ爰ハ代ようの始末其後嵯峨啄斎十三ケ條ハ事ハ爰ハ代ようの

○小座補之新

四畳半系小座敷とい一四畳半下ハ初後とも坐掃
となれ四畳半上ハ道具畳計坐掃となれたるなり
一皆空たをすれたを張しるべなる架
圍の始ハ珠光東山殿正寛十八畳の間と四ツ一ト分
かたひとなれが溫觴より其後紹鷗ハ畳敷たのと又
四畳半すすり道具敷ばくる畳利休
敷すり

四畳半畳之名所　紹鷗好の四畳半ハ二枚障子すて左右ハ
マイラウ張障子すし利休居士塗障子を塗障
一窓を明ケ〻ばり敷付ら

一間半三の割一ツ分ハ道幸表ハ九ツ引
一ツ分ハ後ろ口を敷居の戸ハ裏に引
道幸の戸ハ障子の内引後ろ口を敷居
ハ障子の外ハ引



四畳半と引切る附ハ如此引切る
如心斎好となり

二畳台目　少庵京師二條に住居の節初めて出来
中柱に入碁石の形に彫しそれを碁目といふ支也
胴筆と云ふ也碁石ハ真のうらひく面ハ通じて
利休形といふ
右此席の支ハ少庵利休お伝の上好なり此席に
利休通ハ此はじめて好む是ハ太閤御招のそなへ
此通ハ此むしろハ唐ロ（カラロ）にといふ
一畳半　少庵好の二畳半碁目とかくにより自中なるとそ
利休居士一畳半とは此の世居士其民一条通蓮屋町に住
居の節ハ四畳半と一畳半との小座敷なり一畳半に
床とはなしハ原叟好く今長者町天王寺屋の下屋敷

にうつり花入床すしてを畳にうつり
○一説に一畳半ハ板床を宗旦はじめなり大徳寺中
芳春院にうつり
二畳敷　利休好れども後にうつし紹鷗向付小る中切
落し一畳半にはいらむ花は二畳くハすの中板と入るハ
嵯峨寸好く
二畳向板　叶箱好
二畳中板　ぬく寸好
一尺四寸中板入炉切く左上ヶ碁目
一畳半中板　一箱好
江岑一箱お人お使の上好左関居先又リ也　板巾八寸

又中板入畳目切

三畳変　江岑好磯床く

二畳畳目　織部好

三畳口畳五畳ゝ畳もぐも畳目切ハ皆織部より好始る

今三畳畳目藪内より出る也も織部好三畳向板入ハ

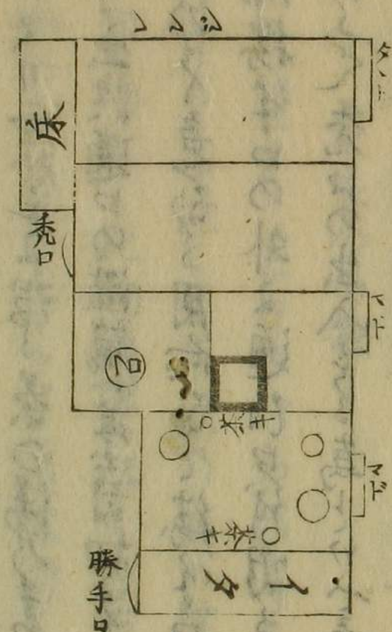
啐啄斎く利休の一畳ましと江岑の三畳とを合て啐

啄斎好まるゝと云

長四畳　元伯好

大徳寺見性庵より上ケ畳目あり

不審庵　少庵本法寺前へ変毫の者利休居士の遺図



四畳畳目　織部好悪しを四畳半二畳畳目一畳半ハ三

度変ゞ小ざゝきの溢觴く其除のほかハ三畳変より

変ゝ来るなり

但ゝ廣間ハ口畳半五畳とをいふなり

勝手口　ホタテ口と火燈口とを限る（火燈口スリ
マハシを勝手口と通ひ口と共拵ふ席ヲよりて約束
も有り古風なれ引遠い様なれ勝手口と通ひ口と兼
用する所も有り堺臨宗寺利休好の二畳半目の引遠
ありデクチはなるべき席也

通口　又リマハシを限る茶の湯乃菓子煙草盆通ひ
口より出る通口の濫觴八畳半切なれ点茶の為貴人の
為へ行く為なる用向なれど勝手口より中上雅なる
利休勝手口の外なる通ひ口は明るく更板ヲ見と兎
口と云へ兎口の出入する為と云ふ

窓　紹鷗好の四畳半の張壁と塗壁すしろくスリ殺しの
窓と唱ふる所居士なる好ふ

定家卿の歌ヲ

大雲ヲ宗めりけれ居ちるく
すなる夜ふくる秋乃夜のはよ

連子　突揚窓　北向道陳の好なる居士のなれ
地ちの雪代乃ちなる道陳はなる上ケ窓なれ
以ケ突上ゲの本を萱ブキを用ひ長短とも板の角外
竹箒好のみ〻かれ本ケ風ひはよれ長ケ用ひ
竹を長短とも夕〻キ屋根ヲ用ひ目を茶すして
ちつなまして用ひ

クゝリ口　ちなる大なる竹を妙喜庵より牧方の漁人乃

家の小さ戸口より出入するを乃ち〳〵居士始く好む
戸　夜咄を皆戸と入れ〳〵見付のクヾりの上を忘ず〳〵
障子　障子より客を入る家に初て障子を作る
　昔は下ざまの障子は竹を骨よせ〳〵板小口を
作る〳〵竹骨に用ひ
　竹障子の骨は横は皮付に上へ置は一本すゝ皮を乃付
三本は中の皮を乃付左右の二本は向ひ合せ二本とも
向へ合たる竹障子を小障子と云て限る木を作る
　を貴人方より

▽ ‖ 中骨二本ちれは皮の方をき合せ

△ ‖‖ 三本ちれは中骨皮目表身キ

□ ‖ 中骨一本ちれは皮目表身

○ ‖‖ 横は何本ても皮目上よりする

額
小堂安すれは不審庵形本と成板の木すれ古溪
和尚の書く彫て掛形を成る

□ 不審庵

茶大江古溪書
于茶閣室□□

焼板は元伯好緒を張て
取込の乃額を咩羅好まく
彫額又は打付書も有とも
用ひ紙額は用ひず

花入釘　柱へ打ハ平座ニハ九座落し　急ぎ用ニ
利休外ハ元伯すゝの塗出し　揚枝柱の釘ハ元伯ハ釘
と柳釘といふハ悪し　花釘といふべし
○床の吹貫の本客より見て成ハ内のまゝ釘とす　太敷
舟と無る見ハ釘も花入も仙叟好へ
○基目床の釘ハ大斧床ハ三尺三寸程より柱落し　急
より一尺一寸下げて打　袋込床ハ床縁ぎわ上げて打
より大床ハ八割　大斧釘ハ畳ぶし　より
低ハ　〃
床の恒鏈　床の天井三ツ割一ツ分見込の方奥行き長
中鏈先ハ床に向ひて花クサリと左のほうへ無る

ほうにすなく　但し上坐床下坐床ともに
稲妻釘　付書院嵐鏈細羅カギ先と前へ向て打
釜釣ヒルカギ　炉に向くクサリと右のほうへ無る
カギ先と向る中柱に席ハ不用かゝ込ハ皮付
蒸すゝ付るゝ横木ハ元伯好く
天井　小坐敷ハ細代蒲長片　八三通く板天井ハ
小坐〃さる開ひば嵯西芳寺に居士ゝ
三畳敷の縁乃上ハ丸天井に丸天井に光悦大屋庵ハ八畳
の内ハ畳ハ丸天井に
カケ込　上の板をワリノ子平ノ子横アキ板ハ宗全
好きいづまも竹タルキ　ウリス、竹幅八分の割ハサ

て寸を江岑好なり

簾（スダレ） 小堂〳〵さゝ皮付の葭（ヨシ）廣間ハ皮ムキの葭（ヨシ）白竹ハ

勿論伊豫（イヨ）竹すべもよし〳〵

襖（フスマ） いろ〳〵ハ出合なり〳〵千家ハ黒塗縁よかゝる唐

紙形を桐（キリ）白張の袋なりハ引遠ひよ限るまた佐の袋

張口枝ハ江岑好の三畳よ用也原叟好く

引手 玉子ハ利休形 桐ハ原叟好 床机茶入大徳寺

形くいづれも惣黒を大小ありて茶の形を用るる

ぬん紙好茶革樂焼原叟好但〳〵茶革また佐る

袋張て用也

畳（タヽミ） 六尺三寸よかゝる京間を厚サ一寸七分く大板る

一寸八分（六尺五寸巾ハ二寸二分多）

中板 大徳寺の形者（アレジヤ）山田氏て元伯好の中板の席る

巾中板の始く（山田氏といふハ無畫油といふかるをと製する家て大徳寺まへなり）

二畳中板巾七尺四寸 ぬん紙好

一畳半中板巾八寸く

○床之部

利休形 二方天井まで塗〳〵妙喜庵の床也く

板 カマチの入るる紙板床といふ利休形

踏込 カマチなるを摩と擬と一枝なる紙いふ少庵好

土 ムロ床の通るを壁の面を土なりて塗其上と紙

を張へ左官土砂へ元伯好を塗る

洞（ホラ） 利休形ハ壁目より小口中の洞

○間口一尺五寸中の洞を原叟好龕脇床（カンワリ）といふ

壁床 利休形へ席中の壁ふ魚拓をかくるなり

○釣棚之部

一重 利休形へ棚五寸の釣木向切り中柱にて

客付中柱ハ紀ハ縁より但し板もたり中柱にて席

を板ハ不用利休形の壁目より中柱紀ハ縁より

方へ板の一重棚を釣る也ゆえ

二重 利休形そうしハ吹屋より上りてとまる不審庵

三重壁目吹屋より下りて釣る天井より下ハ釣竹之棚

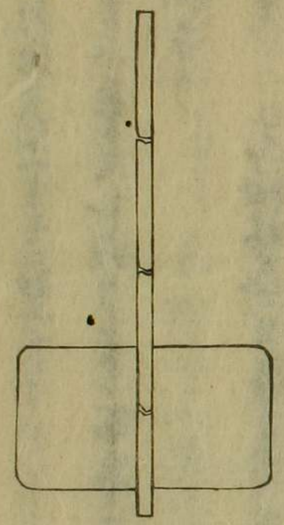
そう棚をかしの釣木

釣茶棚 仙叟好板をを左縁より好斗同じ右縁より

用也裏流則五寸を安より行り今寸を表より也寸傾斜より

はじめて用也

利休堂 仙叟好板斗同じ蛤棚といふ釣木竹之



炮烙棚 元伯好板又隠の縁より用也芝溫舊之

料紙棚 了之好好板床紙了用也釣木竹之

道幸　利休形板後ハ開戸にする板行袋釜ヲ行にする叶義
より袋行とする極意ハ後の開なり水さし〳〵水を加ハ板変
ゆる意なるの上ゆる意なるり
○飾道幸ハ墨スレにする茶を墨目ハコビヨ茶の通り
吉野板なり
水屋道幸　元伯好今日庵ヨ用ヒ仆義一重棚なり後
ヲ板常垂戸と入れ夏ハ戸とはづし簾成釜ヲ袋ヲハ
桐の釜蓋成用ヒ極意ハ水を墨用ヒるなり約束向
垂板の水茶ハ井なり
○柱類
床柱　松　板　檜　櫟ハ原叟好浪義海部屋二垂の席ヲ

はづしなれ共墨目床の柱ヲ用ヒ
但し茶入行元垂入生なり上へ三尺六寸ヨリ板
床なれば二寸七分ヨリ三寸程上なり左柱行ハ向壁なり
一二寸ヨリ
中柱　松の皮付　櫨（ハゼ）ハ方ヲ皮ハいずれ〳〵ハ垂木を用ヒ迫木
原叟同代なり ユガミ柱紙用ヒ
塗出し柱（俗ヨヤウジ柱なり）板なり　元伯好又隠の隅なり いづれの席ヲ
用ヒなれ共又隠の寸法を用ヒ又隠ハ座より天井すぐ三尺
六尺ヨリ寸法を一尺一寸下ヲ茶行を（俗ヨ柳行とも）
歩〳〵其割なり天井の高下なり かまを床下なり五尺
四寸ヨリ歩べし

捨柱　新(ノキ)の垂を除くしを柳を用ひる端の地まりの
ものに有て立る柱く枚九太栗のナグリ
間柱　塗壁しー宗の外ツラへ張る竹く宗の大小ハ壁
柱寸法まるまる寸四間柱とつくえ未塗の助ケうり竹を白
竹まて先口寸四寸但しー間柱ハ間ハ簾かけ釘打法
おしー長しし　別ハ出ル

○庭之部

露地口(ロジノ文字いろく　ろれんもしは文字あれ)　外戸口(ハ)成いく引戸と用ひ
待合腰掛　外露地と待合とひ内露地と腰掛とく
堂腰掛　利休形外露地ハ腰掛をクレと用ひ元未辻堂
かくとうたる板堂腰掛とい原豊好の牛蒡屋ハ堂腰掛く

中クヾリを引付ふるもり待合腰掛堂腰掛ともハ田堂
烟草盆ハ未席壁のいろ方ハ壁く烟草盆ハ煙筒(キセル)を客
の方へ向くせるハ壁ろ
萱(カヤ)門　利休形萱ブキ家根表よりず柱の埋込柱戸ろ
上ハ松の皮付二本入れ下ケツリ木のヌメシキ一枚の
大開戸の内ハ小クヾリ戸ハ鉄の横関ハ壁と手魚
まとめれ
中クヾリ　織部伏見の屋敷ハ武用のたそはすしめて好
まれしまし板の埋込柱ハ壁と付を二ヒリ口より天
ぶり板戸を用ひ板屋根ハ方へさしせろしー戸尻ハ塗
張しー長宗陸子ものしー簾ばろうろ

角戸　猪戸ともいふ　利休好大小いろ〳〵ありて栗のナグリ柱ハ根よ戸いろ

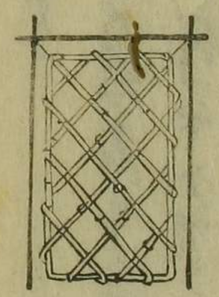
揚簀戸　半蔀ともいふ　好て揚よいろ〳〵ぜんとうしてもいろ〳〵仮用ゆ

小竹簀二ちいろを路二ツよりて結ひ枝家地などに用ゆ揚簀戸

竹をいろ〳〵かゝ〳〵の竹ばかりの竹簀戸用る時

客をいろ〳〵揚ゆ〳〵又左ゆ紀付ゆるも用ゆ

半蔀之図



此図少し筋違ひよりつる度上ゆるゆ八ツ竹枝

用ひ先石のけづしよ突張ゆ事

梅軒門　松の堀込柱松皮屋根竹簀戸のあひらさなり松

廣庭の見切よ用ゆ竹よりてあれいろ客をむ〳〵つゆ

〳〵かゝ〳〵沒

京クヾリ　松の大引戸よ小間の戸いろ分家地よ用ゆ

土橋　千家大茶の庭乃空堀よかゝ松橋の端りに蔀

いろ橋ハ板と〳〵紀出とむゆ縁ちとあ先竹と好ゆし

むゆ〳〵ゆ〳〵ゆ

空堀　千家大茶の庭ゆ〳〵いろ間ゆ〳〵庵ちとこの

柱石いろ堀乃きゆふよ水鉢を出ゆ下水を堀の間へ

ゆ〳〵沒

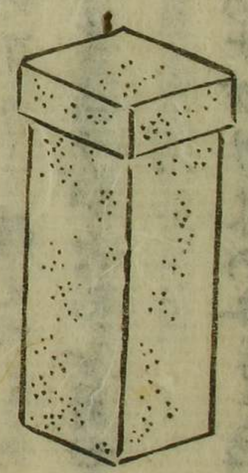
石よ水鉢　松の枝長柄　水溜ゆ〳〵渡し七寸深サ六寸程

石の大小もよろし利休伝持の四方佛も水鉢八今法水
寺よりて桑(フクロウ)の水といふ何者か仕そうゑん其こへ角
なるも水鉢と言ふ絲筧もて水吹上る
も水桶 蓋 椹(サワラ)木の桶松の蓋拵物不淨水なりも清淨
水なれども用ひ
不淨業(ヒヤウヤクハシ)灌 二重露地の使ふ伝を業灌ハ用ひ廣露
地なり竹を桶と用ひ一重露地ハ廣狹よかるべし水鉢
ばかりもて不淨水なりさと紙不淨のもの紙淨くもて
まづ物の端ハ紙持物底ともの紙あるべし其ほうを物の
中程紙持てかるしを法ひ後ほどすぐ
石燈籠 蓋 油盡 古寺古社よりうしを用ひ其外名物

ばかり蓋ハ板ハ月のすうう 但一八日月なり陰子を
十文字明ケ物ほうもて用ひ利休形
油盡ハうゑ好弥助作赤 今ハ紙用ひ
木燈籠 輪 油盡 利休形陰子と二日月とむうし満
月と半月と向ふ油盡を居る物を休なり
仙叟好ハ満月が角ありなり 左仙叟好満月と陰子と
対をなしとも表流ハ不用
金燈籠 利休形業のすうう 猪くづしの二ツなり
其除を古寺古社よりうしを上るびたるを用ひ今十家の
利休者よりうし
燈籠基 利休形業のナグリ木の蛸ほこるサ一尺八す
江戸好の石ハ基ばかり一尺六すく蛸ほす法二すうきハ

蛭ヶ嶽流の度へ十文字入れが板ヲ江岑好石臺
同様ニ成ル

白川石なり



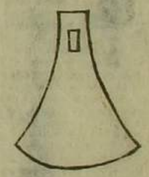
井戸　側ハ栗のナグリ利休形ニ但シ世間ニ原叟ト称スルトイフ
○石ハ古ク伝ル仮用ニ石ハ原叟好ミトヒ使ヒ
クル巻釣瓶　クル巻ル〻渡シハサクル竿釣ハ
栗のナグリ柱一ヶ又二本ニ成ルモ有リ
釣瓶　金木ニも好ム〻物釣瓶ハ利休形木の角
ヨリ藤縄車の方金釣瓶ニ

壁穴　九角　九ヶ九七寸角ヶ九一尺二寸四方ニ〻
庭の大小ヨリ除縁ハ外地ヶ二分上ケる平シツクイ
ニ縁ヲ〻〻
雪隠　露地口ヶ外ヨリ行ル〻ガ下腹ヲ便ト通ル雪隠ハ露地ハ乃
内ヨリ行ル〻ガクレ板雪隠クレ板ハ板セツイ〻の廣サ内四尺或ハ
クレ板ハ板の内二枚切ヌキ左右ニ板ヶ内露地ヶ
砂雪隠ヲ
砂雪隠　堀込柱内ヨリ踏石九ヶ磨ヶ完蔵等觸板等
子行ル御影石ヶ白川石ヶの屑ヶ真中ヶ隅ヶヶ盛ル
入口の石ヶ戸下の石ヶ石ヶ一両方ヶ踏石ヶ一白ル小使
返シ〻〻後ヶウラヶ〻出口ヶの石の百ヶ砂ル

指込て待るの方よ狭む砂雪隠にて座よハ炉蔵
第不用なり
飛石　一番石ハ石の上てうづつくに生姿の姿居くいざの
かゝ所なるサとよりとも猶なり六す明き　○二番石の
ゝるサハ一番石と二番との間く一番と二番との明き
芋履と横よ入ゝ程次第して此明きなり○二
番石なりゝるサ二す
個〻二番石ハ定めるサ二すく二番で居ものて
一と二と足合ゝく其後よ二番を定るく
捨石　類さるを石ハ用也数極てるふ〻庭の狭ハ
なるなり

鬼瓦　江岑好ノ七カウ瓦赤く千家上檀の間乃屋
根棟よりう後家入よ高ゝ写せとう考ゝりしが
大風の為松板打き碎たり吏板ゝ入よ高ゝて造
らしむ是も大火の為焼失ノ七カウ瓦ハ今ゝ所ゝ
○庭畑小道具ゝ新
寸第
名所の茶舎ゝ古ゝ用ゝく考ゝ茶口五数
さ〻ゝ流ゝり飾第二ゝ所ゝ考ゝ茶第八待合よ用也
個〻炉風炉改むる事
蕨（ワラビ）帚（ホウキ）　かざ〻第二ゝ所あれど小生姿よ用也ゝ孔雀隠
ゝ座ゝ無ゝ砂雪隠よ限る
磨（ミガ）著　淳家ゝを籌子とし

鶴枝　利休雪隠の石屑にかゝる歟是を利休と仙叟と好こゝろ



露地行燈　松本地溜塗蓋裏塗待合上客の方より
手水鉢に附たる竹を碎く立かゝる竹を並べ組し
足を碎く流る風にるとゝ八ゝるとゝ紙あり油蓋裏
も赤塗く枝楊枝何も利休歟

組し行燈ハ笠ゑりハ黒モジ
庭ゑりハ枝楊枝くゝとゝるべし

圓座　利休歟竹の皮獵波圓座に用てもよし

笠　利休歟竹の皮熊野笠松網代組用てもよし

草履　むしろ八ひらくゝ利休竹の皮乃裏付を

ちかむ是雪踏の始り裏付に成すべく雪踏と唱
よし雪とゝ成べくゝ

下駄　利休歟枝よ竹の皮ハナヲく

杖　利休歟白竹の上成竹乃皮すて包こ紺苧すて老く

湯桶　利休歟枝曲物刳ゝ云是寒中浸置る用也

用ひゞ歟八年毎の卑下く初入の手水八客の

浸入毎食後毎是抱ゝ成ゝ湯桶を出し

他毎ゝ水鉢へ出ゝ入ゝ初坐ゝ出し

ゝもよし

手桶　枝の桶ゝ松の

ゝく奇好ゝ

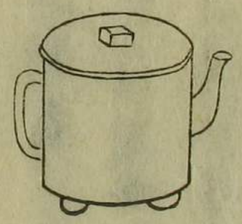
水漉　利休形板の曲方へ二本角ヲ付
簞懸竹釘　大工方ハ大面と云利休ハ丸面板も用ひ
長サ一寸二分板釘も用ひ利休形
笠懸竹釘　利休形長サ一寸三分
刀掛　板の組刀掛ハ利休竹組ハ元伯好又隠ス
用ひ竹のクリカタ五種掛ハ仏仏好竹ヲ桐成ウロ
ヲ形ハ元伯好大徳寺芳春庵ヨリ

○水遣ヲ新

水遣　むらハ縁側ヲ仕舞ヒ不審庵ハ
水ヲ乃始ヨリ不審庵形又ハ桐葉桐二重松何ヲ
も板ヨリ又ハ棚簀桐ヨリ一方塗ヲ下ハ今ハ家

ヲ両方とも塗ヲ下ハ長桐ヲ廣間ヲ塗ヲ水ヲ
用ひ形ヨリ
月開ヲ物入　啐啄好塗縁モミ帛黄ヲのヲ用
生カ子の形ヲ
水桶　利休形板ヲ桶の別蓋
水壺　和漢置ヲ品と仮用ひ
掬茶　水漉　二品とも板曲形
三ツ入茶通箱・桐蓋のヲヤクリ二方ヨリ長ヲ利休形
四方ヨリハ元伯好く
茶巾洗　利休形板の曲　金八千家ハ砂張ヲ
焼物深材ヲも用ひ

茶羅　和漢とも形写有さ物式用也　擂鉢の茶羅
も利休形よりうぶ見聖茶羅式仮用ひらかゝ
所口　大中小利休形ゝ中ゝ裏よ用也大小ハ表よ
用也釜ゝ水を加ふるとき紙ハ小さフタ式用ひ大
ハ蓋式用也



大口　好形　元来水指の具ゝ釜仕愈の為り
釜ゝ水式入ゝ水ゝ入ゝ水式入ゝ釜ゝ水指よ用
ゆるハ如ゝ此ゝ始ゝ
釜居　利休形両面枚

釜洗　掇ハリカ子巻
拭巾　麻布長サ一尺二寸横布巾端ヌイ
雑巾　寸法同拭巾綿ゝ
ゝ拭　晒木綿長サ一尺四寸端ヌイ乳上より二寸下ゲ
右三品のすゝぎゝ新ゝ物ゝ定ゝ何ゝも縫ざ
帛紗　紫　茶　紅　利休形ゝ今黄色ゝ利休茶ゝ習用ゝ
相傳物ゝ用也　啐啄ゝ新織習用ゝ
純子風津の類ハ出し帛紗ゝ用也
茶巾　金指一尺ゝ五寸大の方ハ一尺四方ゝ
むゝハ迎江上布ゝ用也今ゝ茶良晒布ゝ用也
茶筅　油竹のゝ用也白竹ゝ竹ゝ用ひ

○寶来　八十本之　○数穂　六十九本
○中穂　五十八本　○荒穂　四十七本
是と覚由れハ四五六七八九と覚申候
四十七本
五十八本
六十九本
寶来のミ八十本ゝ
茶炭汁　利休ハ茶元来侍ハ道具之先人伝者
を平生より持くもよろし。ツカミ結　ツボ羽十文枚
左右ゟ結ツボ羽とハいづれの侍ハ共ゝ用申候
○板釜之図　利休ハ釜ハ底ハ平ゝ用ゆ

○炭汁の内羽根を釜ゝ浸ゝ釜之ハ方かゝ風呂の内ハ
鉄張火箸炉ハ柴柄
茶ハキ箒　利休ハ桐の三重巴サン茶の革紐門ゟ茶合と二重
茶漏汁（ジャウゴ）と銀の茶杓と紙入れ茶合ハ挽茶一人茶九
分の積りゝ二人茶二ノ文七分入ゝ茶漏汁大ハ
柄小を挽（ヒラギ）茶杓ハ銀ゝて柴柄茶壺上ゲ紫（ジャウ）紐フタ
革紐を宗全好ゝ
茶篩（フルヒ）　利休ハ柳木地・
挽（ヒキ）溜（ダメ）　むしハ唐物大海と用ひそれども土の物ゝ
茶入と挽ゝ　ゝやゝと利休大茶柄一対ゝ落茶ハ行ゝ
其後元伯極法の字と甲ゝ朱書ゝ溜茶とかゝ

濃茶入甲之極の字ばり有茶入
甲之結の字ばり今十家よろし

挽溜茶桶　桐茶筒フタ元伯好桐サン蓋ハ原豊好
桐ふた地共溜茶筒フタ元織部好

茶臼　挽木名　和漢ともよし用也　挽木名を桐さしの迄

蓋ろし

半円　和泉半円焼と云ふ焼ま円と云ふ
むしハ大炮焙と用也ハ底取炮焙と云ふ長二郎
などに大炮焙ばり是ハ底取ありいろいろ用也半円ハ
二つとも茶焼あり茶かうしハ好と相手ばり
小の方茶かうし風炉の半円ありの吾子郎作是ハ
金入ばく秋好あり

長火箸　炉ハ丹の皮紺茶色風呂ハ鉄の袋張
底取　炉風呂とも竹の皮色
火吹竹　利休鞍サビ竹節二ツ
基十能　利休形鉄基柄茶
炭切溜　松十文字足
炭箸　枝の八角
炭割　鉄の十夕松の柄
掃込　広多ハ右の片桐鍔モロ桐南蛮とも客の布
すそ用也但し広多ハ老人傍輩の者時ハ上下長用
の者よろし
座掃　鳴の片桐鍔ば物あり客の茶ばハ不用中立用也

麈取　利休所相傳の仕方のハシバミ入れ

愈隆墓　利休所樂の二枚ち茶小の方と同色地ぢく
地文ヲ法ヲ揚枝を生の内をクロモジ屋を枝と
なるべし

○棚物之部

臺子　真大小　共墓子唐物ヲ使ひ千家伝持を盛阿
弥の作大の方と面同写し　茶碗小の方ハ利休時代
ちうこの家ヲ作朱うるしが中ばかり作ぶるはし
ちなれば仏教再興ハ
及墓子　唐及第門の形ちとゞ統もいまゞ及第の
ちなる作文と云く墓ちんれ

竹臺子　珠光好本第ハ清池宗三郎伝持ヒヤリ鋏（カニチ）柱を
傘の柄竹と用ひ（下ハ枝を付よハシバミ入る裏流南）
凡紅墓子　元朱唐物写し墓ちを八ケメ作るしる紅を
出作ちうこの家伝持ハ制を目ちし　紹鷗門人東宗南
伝持ちを共利休百貪ち宗南棚と作ち也凡紅の事
ちり（但し宗南ちうこ懐の住人紹鷗門人ちう）
三尊藤墓子　元朱唐物写しちうと元伯ちう持ちまこハ
浪華天王寺屋氏台湯伝持元伯出付作ち後一宗ちを
ちうこ作ち

紫墓子　原叟好凡紅の通ちを紫ちを写れ
長板　真大小溜　共の大を利休所小ハ仏教溜ハ宗全之

大一枚松の木地といへども寒ハ松木地へ
同棚大小　同一閑大小　棚大小とも淀流好裏ハ元伝
好といひ伝へ棚ハこばこ入る行小の方ハ紀州へ
一焼葉ハ好む一寸張ハ大小ともえ伝好ゆ
紹鷗棚　右名紹鷗袋棚といふ是今の紹鷗棚の事へ
紹鷗伝持の棚をヤリカシナの木地引遠の溪大粕モヘギ
地右金寸小縁金地右金寸南蛮サハリ水指法々鷗地
栄三郎伝持へ。鷗の歌ハ
我名を是大玉唐といふ孔を
始へる棚ハ我秘蔵とおもふ
袋棚　利休形葉の巻野棚と棚を字しゆる物へ

丸卓　桐是利休形木地松木溜ハ焼啄好へ
四方棚　角のいるる利休形むしハ利休水指をもいひ
又ハ碁子ともいふ角の丸さハ江岑好へ
旅算盤　利休形一流ハ小田原陣中ハ好まれ故へ
旅算盤といふ
三ツ木町棚　江岑紀州三ツ木町浮屋中若堂の作ゆ
桧榧(モミ)板の寿セ木へツマミ竹江岑伝来の棚ハ海池
善右衛門伝持棚ハ原雙ツマミ葉
ゆる隅卓　宗全好一閑ハ塗ハ好ゆ一ゆる隅碁子式
ハかゆ切たる物ゆ是塗ハ海松屋ゆ塗ハ
葉の小卓　仙叟床ハ用ゆ卓ハ好へ寸法ハ力マゴ

の底ヘフクベの細口の底入ヲ取合ル底業桐ヲ用ヒる
此ハ茶好く
三重桐 一閑 桐 業 一閑張宗全好桐ハ原豊好業ハ此ハ好
○七事 別ヲ七事の書ハ牧ヲ略ル
七事の内四炭茶カブキの三度ハむ〜ろう
ハろ〜ろる者〜其除の四度ハ此ハ茶新ヲ製ル此ハ度出
茶の後乃碁盤（ヘキガン）の法ヲ七事ハ名ヲいふよりやづま
乗人の故茶ろうヲ先ヒ二三の式と製〜七度
の数ヲ合ル
花月 始ハ茶ヲるとい〜四事の花香の札ヲ主客共定む
茶ヲ梅ヲ雑ヲ夏ハ桐ヲ寒ハ業ヲ秋ハ業ヲ碁ヲ松り〜香の

札と用ひろう〜此後四事通用ヲ茶月ヲ定む此ヲ花
茶月の二字と書〜て茶花香の札ハ換〜
且座 趙州の法ヲ且坐喫茶去の法式ヲ用ヒ
茶カブキ 仮名ヲ書べ〜大折居ハ五寸四方ヲ白紙
ヲ金砂子小折居ヲ表濃萌黄生鹿裏金布 目大サ一
寸五分四方小巻茶月ヲ用ヒ
一二三 月ヲ上の上中下空ハ中の上中下花巻下乃
上中下客の札ハ亭ヲ跡粗ろ乱目の如ヲ
用ヒ硯蓋ハ十種香箱のフタヲ用ヒ
○茶師 并茶名
上林ハ元丹波ろう宇治〜居る人〜 公儀の御用ヲ勤

むら代御袋茶師と云次の御用を勤ると御通茶師
といふ其次と次茶師といふ其外ハ未幡大風寺へ
茶名　初昔八慶長の比なるむらハ白といふ製なるとが
中比よりまとといふ製なるとと慶長の比むらの白乃製
り定め給ふを商内白の製と知らるハ上林の後宮の茶
し数寄く昔と御銘し給へり組毋昔ともいふ但し白まといハ
畑の名といへり
七園の歌　○栗○宇○う文字○川下○奥の山○旭の禁○昆陽とひくく
○茶の　皇帝より伝りし給ハ紫西祥坊入宋茶の徒種と
とり始り新茶脊振山より種人其種武明恵上人へ授りて
栂の尾より植し世を支とり又宇治へ移植せられて栂の尾

の茶を本乃茶といひ宇治の茶を枝の茶といふ
○薄茶
極結　別儀　極採　別儀採　宇治の茶園に名の分ること
茶一斤　二百目入　宋と云八十文入　小宋と云八文入
○濃茶一袋二十目入　宋の価格下三文の分　中宋の価格中八文七厘　昔といふ名よりハ当孫一斤の価
別儀採　一斤ニ付　十三文
極採　〃　廿六文
別儀　〃　八十二文
極結　〃　七十八文
通例の濃茶代歩と同じ　後茶代二割増

宇治いづもの家よりも代定うり三十目代四十目代と
いへハ毋の茶といつて宝世よりうば
○初昔　後昔ハ壺の大小よりかくいつぺ黄金一枚
此茶壺ハ大きなる物にて不可なる儀ハ壺ハ
取付一袋金百疋宇袋南蛮一斗位の礼と

御物茶師

上林六郎　宇治

○初昔　○後昔　○祖母御茶　○好の分　○祝の白昔
○若緑分昔　○壽ノ瓜昔　○ふ摘昔

同　又玄湯

○初昔　○後昔　○いノ昔　○初壽昔　○鱗形

○唐金　○広世ろ　○大芳　○判むら

同　味卜

○初昔　○後芳　○祖母御茶芳　○一文字芳　○大祝広芳
○初壽瓜　○壽瓜　○大昔　○むら　○卜昔

同　春松

○初芳　○後芳　○祖母御茶　○ぢぢ紫芳　○いノ昔
○大祝昔　○戸の内芳　○白芳　○大むら

同　辛入

○初芳　○後芳　○一文字芳　○う文字　○壽瓜
○ふ芳芳　○初壽瓜　○鱗形　○大芳　○祝昔

酒　多宗有

○初芽 ○後芽 ○一文字 ○花の広 ○後くのむら
○末の広 ○御摩り ○白芽 ○大芽 ○大広

尾崎有庵

○初芽 ○後芽 ○いゝ芽 ○ろゝ芽 ○初雪瓜
○う文字 ○不精 ○後、紫芽 ○大花芽 ○大広

星野宗砂

○初芽 ○好ノ白 ○う文字
○花 ○小広 ○後芽

上林三入

○初芽 ○後芽 ○一ノ白 ○花ノ白 ○丸ノ白
○小白 ○白雪瓜 ○大白

堀真翁

○初芽 ○後芽 ○後、紫白 ○小林の白 ○若葉広
○う文字白 ○戸内の円広 ○花の広 ○小雪瓜

長茶宗味

○初芽 ○後芽 ○一文字 ○初雪瓜 ○錦耶
○屠金 ○白せうゝ

辻善徳

○初芽 ○後芽 ○いゝ秋雪瓜 ○楪(ユヅリ)葉の広 ○広芽
○小雪瓜 ○大雪瓜 ○白芽 ○大芽

右八御物茶師之分

御袋茶師

上林牛加
○初芳　○後芳　○一ノ白　○秋寄孔　○子猫芳
八島德庵
○初芳　○後菅　○寄孔　○小猫　○初寄孔
○房金　○祝ノ白
祝　甚三湯
○初芳　○後芳　○いノ芳　○若ノ森白　○う文字寄
○戸の内白　○初寄　○寄孔　○鶴孔　○祝ノ白芳
堀　正法
○祝菅　○後菅　○う文字　○一文字　○戸の内白
○大祝　○小松の白

佐野道意
○初芳　○後菅　○初寄孔　○大寄孔　○白菅
○ノ白　○大芳　○祝芳
木村宗二
○初菅　○後菅　○西つう紫白　○大芳　○初寄孔
○大祝の白　○鶴孔
竹田紹且
○初菅　○後芳　○初寄　○後ノ紫　○子子猫白
○白祝芳
上林道庵
○初芳　○後芳　○喋　○祝　○初白　○芳孔

○けつし　○はつか　○ちくさ　○柳

竹内道雲

○初芽　○後芽　○いノ芽　○一文字ふ　○う文字

○ゆノ白　○若葉　○子多　○小橘　○子橘芽　○大枝

右ハ御袋茶師ハ分

御通茶師

片岡道二　宇治

○初芽　○後芽　○一ノふ　○初蕾ル　○房金

○いノ白　○ろノふ　○白芽　○大芽

宮村權ハ史

○初芽　○後芽　○旭ノふ　○初蕾ル　○いノ芽　○白芽

西村了以

○初芽　○後芽　○一文字　○初蕾　○う文字ふ

○枝大白　○橘ノ白

竹内紹清

○初芽　○後芽　○後ノ葉白　○若葉白　○初橘

○小橘　○子多　○鉢形　○若ノ芽　○枝の白芽

河村宗順

○初芽　○後芽　○いノ白　○さくら　○う文字小ふ

○枝の白芽

楊本玄哥

○初芽　○後芽　○若ノ葉ふ　○旭ノ蕾ル　○う文字ふ

○花の白　○川ゝの白　○琵琶の白　○奥の山

馬場宗園

○初昔　○後昔　○う文字　○初雪丸　○厚金昔

○戸の内昔　○一ゝ昔

蒙牛道加

○初昔　○後昔　○う文字初白　○いゝ昔

○花後昔　○一文字昔　○雪丸昔　○蒙の公

長茶清左衛

○初昔　○後昔　○いゝ公　○う文字　○去蒙ゝ白

○鉢形　○内屋の公　○白昔　○大昔

麦多左衛

○初昔　○後昔　○一文字の公　○柳ゝ白　○いゝ雪

○ゝ柳昔　○去蒙公

同　長八

○初昔　○後昔　○初ゝ公　○いゝ公　○大白

○子昔　○花ゝ白

松原宗左衛

○初昔　○後むし　○去せうし　○一文字公

○花ゝ昔　○色ゝ公

菱木宗見

○初昔　○後昔　○いゝ昔　○一文字初公　○去ゝ蒙公

○色づり蒙　○ふむし

蒲田宗惠
○初芳　○後芳　○文字屋　○大徳　○西浦宗
○長泉坊　○不描白
長田七郎右衛門
○初芳　○後芳
小山傍右衛門
吉田六右衛門
小川与兵右衛門
藤科金兵衛
宗林六之丞　大風寺
○初芳　○後芳　○桃ノ坊　○千代坊　○八芳　○初春坊

○藤芳　○藤芳芳　○内屋ノ坊
梅林宗雪
○初芳　○後芳
東江宗左衛門
○初芳　○後むら
右毒御通茶湯之分
外茶師
宇治
蒲田道林　尾崎長六　竹林紹二
川崎徳兵　佐藤勘六　中村弥右衛門
大風寺

山上善右衛門　同　幸二　竹林八郎助

河下喜八郎　梅林源治

未懐

猪家庄右衛門　松尾忠助　同　治右衛門

同　森平治　同　長悦

椿島

辻　千太郎

世かるる外茶師多くあるくいづまも茶名安くあるさび墨くく

高石文庫

八百亭